



JEM から MICROSCOPY へ

JEM 編集委員長 板東 義雄

日本顕微鏡学会の欧文誌である JEM (Journal of Electron Microscopy) は本年 2013 年からその名称を MICROSCOPY へとタイトルを変更します。

JEM は電子顕微鏡法及びその周辺技術の理論、基礎、材料分野や生命科学分野への応用に関する研究成果を刊行する国際誌としてこれまで発展してきました。JEM の第 1 巻が 1949 年に刊行され、昨年 2012 年で第 60 巻の刊行を迎えました。JEM の 60 年の歴史と伝統を祝して、国内外の著名な研究者によるレビュー論文を 60 周年記念特集号として刊行しました。幸いなことに、本記念特集号はアクセス数が通常号に比べて約 8 倍以上も多く、世界中から高い関心を集めたところです。

JEM 編集委員会は JEM を顕微鏡科学分野における世界のリーディングジャーナルにすべく様々な改革に取り組んできました。2009 年に私が編集委員長に就任して以来、まず JEM 小委員会を設置し、迅速で機動的に活動できる体制を構築しました。次いで、アクションプランを策定し、1) Editor's Choice の導入、2) In this issue の導入、3) 迅速な査読プロセス、などの改革を実行してきました。その成果は、インパクトファクターの向上や論文数の増大などに結実しました。また、JEM の出版業務を委託しているオックスフォード大学出版局の積極的なマーケティングの成果も手伝い、JEM の機関購買数は年々と増加し、今日 JEM はロイヤリティ収入を得るまでに至りました。

さて、日本電子顕微鏡学会は 2003 年に日本顕微鏡学会に学会名の改称を行いました。学会名から、「電子」を除き間口を広げたことに呼応して、学会欧文誌である JEM のタイトル変更の議論がしばしば行われてきましたが、変更の実現には至りませんでした。今日の JEM の成長時のタイミングに合わせて、これまで長く懸案事項であった欧文誌のタイトル変更を断行すべきと、編集委員会は考えました。

タイトル変更の主なメリットとして、

- 1) 電子を外すことにより、走査プローブ顕微鏡、光学顕微鏡などの新しい顕微科学分野とその応用の研究成果を取り込める。
- 2) 生物系では分子レベルの光学顕微鏡が主流となりつつあり、この分野の投稿を促すことができ、インパクトファクターの向上につながる。
- 3) MICROSCOPY の名称はシンプルで好印象である。
- 4) これまで海外競争誌へと投稿する傾向が強かった手法系・材料系の国内研究者を取り戻す。
- 5) タイトル変更を契機に欧文誌の発展を戦略的に推進し、今後 10 年先を見据えて、アジアを代表する国際誌へと発展するきっかけとなる。

一方、デメリットとして下記が懸念されます。

- 1) JEM の持つ 60 年の長い歴史と伝統を途切れさせてしまう。
- 2) JEM という愛着の強い名前が他で利用されるかもしれない。
- 3) 類似名称の雑誌と混同する恐れがある。
- 4) JEM が成長している時期のタイトル変更はタイミングが悪い。

日本顕微鏡学会は JEM 編集委員会から提案のあったタイトル変更に関して、会員全員の賛否を聴取しました。その結果、回答者の 91% が JEM から MICROSCOPY へのタイトル変更賛成の意思を表示しました。この結果を受けて、2011 年度の第 9 回理事会で誌名変更が決議されました。

会員の皆様には学会が欧文誌を刊行する意義をよくご理解を頂き、会員の皆様を中心となって MICROSCOPY を大きく育てて頂きたいとお願いします。今日の海外雑誌偏重の傾向に歯止めをかけ、日本発の MICROSCOPY を顕微科学分野のトップジャーナルへと押し上げ、アジアを、そして世界を代表する国際誌としての地位を確立させたいと願っています。

藤吉好則 (名古屋大) 新編集委員長の下、JEM を継承した MICROSCOPY がさらに大きく飛躍することを願っています。会員皆様のご支援を宜しくお願いします。